

花鳥風月



いらぬものを
いるものに



今、化石燃料をこのままのペースで使い続けていくと、近い将来に資源が枯渇するという心配が増している。そこで解決策として注目されているのが新エネルギーの開発である。

鹿追町ではバイオガスをプラントを進めており、鹿追と瓜幕の二か所で運営されている。ここでは、家庭ふん尿や生ゴミ、下水道汚泥等のバイオマス（生物由来資源）を嫌気性発酵させることにより発生するバイオガスを利用し、発電、熱エネルギーの生産、さらに発酵処理後の有機肥料として有効な再利用ができるようにする施設である。この資源の有効なサイクルのことを「カーボンサイクル」という。火力発電などは遠く、エネルギーを生産する過程で、大気中の二酸化炭素の量を

鹿追バイオガスプラント

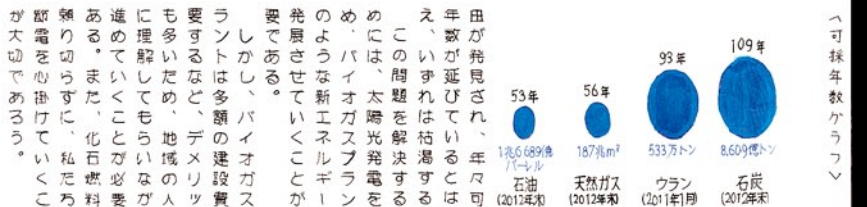
鹿追のバイオガスプラントは、平成十九年十月に稼働し、今では余剰熱を利用した、チヨウワメの飼育やマンゴの栽培、サツマイモを長期保存して、干し芋として道の駅で販売するなどといった取り組みがなされている。一日の処理能力は、乳牛ふん尿で18700頭分の処理能力がある。ここで生産されたバイオガスは約90%が発電に使用され、プラント内の利用、そして残りは売電されている。鹿追プラントでは新しい取り組みとして畜産ふん尿から水を取り出す、水素サプライチェーンの実証事業を進めている。バイオガスプラントから生産されるバイオガスを

鹿追バイオガスプラント

瓜幕のバイオガスプラントは平成二十八年四月に稼働した。ここでは、電気や熱を生産し、処理過程で生産される「消化液」を有機肥料として利用している。一日の処理能力は、鹿追プラントの約二倍である。乳牛で換算すると約3000頭を代表とした然別周辺の

これからのエネルギー

化石燃料の可採年数は天然ガスで六十年、ウランで九十年、石炭で百年、石油に至ってはわずか五十年である。新しいガス



瓜幕の街中に、かつて拓殖鉄道の駅があったことは有名である。一方、鹿追の中心街が、三kmほど北にあったことは、あまり知られていない。その理由が、中心街から離れた場所から来た理由にまで遡る必要がある。

実は、昨年の夏新聞で「三年生（当時の二年生）が、なせ旧市街地と離れた場所に駅ができたのか？」と謎に迫っている結果、鹿追の歴史が明らかになった。製材所があったから、「地形的に良かったから」ではない。今、私たちも、鹿追の歴史を再調査する。

まずは、昔から瓜幕に住んでいる方々に電話でお話を聞いた。鹿追の歴史が、鹿追の中心街が、三kmほど北にあったことは、あまり知られていない。その理由が、中心街から離れた場所から来た理由にまで遡る必要がある。

瓜幕の歴史を

解き明かす

鹿追の歴史を再調査する。実は、昨年の夏新聞で「三年生（当時の二年生）が、なせ旧市街地と離れた場所に駅ができたのか？」と謎に迫っている結果、鹿追の歴史が明らかになった。製材所があったから、「地形的に良かったから」ではない。今、私たちも、鹿追の歴史を再調査する。

鹿追の歴史を再調査する。実は、昨年の夏新聞で「三年生（当時の二年生）が、なせ旧市街地と離れた場所に駅ができたのか？」と謎に迫っている結果、鹿追の歴史が明らかになった。製材所があったから、「地形的に良かったから」ではない。今、私たちも、鹿追の歴史を再調査する。

鹿追の「無駄」を見直す

今、食品ロスという問題が起きている。食品ロスというのは、残食率が高くなり、食品を無駄にしてしまうことだ。それにも、もともと食べられるものを捨ててしまうことで、貧困も深まってしまうかもしれない。これは、世界レベルの話だが、中学生にとって身近な「給食」ではどうだろうか。そこで、鹿追町の給食の食品ロスについて調べてみた。

今回、取材を引き受けてくれたのは、鹿追町共同調理場の澤井さんだ。まず、鹿追の給食の残食率は、6.6%だそうだ。

一方、一般の残食率は、朝日新聞によると1.1.8%で給食の残食率よりやや多い。しかし、瓜幕中学校では、給食の残食率はほぼ0%の事だ。自画自賛だが、これは素晴らしいことである。では、どうすれば

いこうかになってしまったらどうしよう。だが、そんな中でも、味を美味しくしようとしているのだという。そして、残食の処理についても、教えてもらった。鹿追町の場合、残食のほぼ全てがバイオガスプラントに運ばれるらしい。バ

私たちが誇るジオパーク

私たちの住む鹿追町は自然が中心である。風穴はガレ場と呼ばれる斜面に多くあり、夏に斜面の上で暖かい空気が吸い込まれ、涼しい空気が吹き出される。この風穴があるおかげで、標高が低い所でも高山植物やナキウサギといった、北極圏と似た生態系が見られる。然別周辺の貴重な自然にあって、風穴はなくてはならない。そして、風穴のあるガレ場や鹿追の美しい流石山地形を生み出した自然別火山群は、数十年前に大規模噴火を起こし、一本の川を塞ぎ止めた。これが然別湖の誕生である。然別湖には特有の淡水魚で

あるミヤビワナが生息している。然別の自然は大古から続く自然の営みによって出来ている。こうした鹿追の自然を分りやすく紹介しているのが鹿追ジオパークのジオセンターである（通称ジオ会館）。展示室内はジオパークのテーマ「火山と水が育む命の物語」に沿って四つのコーナーに分かれており、マッピングがある。さて、この鹿追の住人の中で一体どれくらいの人がジオパークについて説明できるだろうか。その答えは、鹿追のジオパークのジオセンターを訪ねてみる。

私たちは新地球学の授業などを通して鹿追の自然について学んでいる。岩石の種類、好きな人ではないと知ることがないけれど、調べてみると、一枚をおかきで、この一枚を作ることが、出来た。

編集後記

僕達が作り上げたこの壁新聞『花鳥風月』は、全ての記事が、鹿追に密着した内容で、地域と密着した新聞です。そして花鳥風月という題名も鹿追の素晴らしい自然を表現したものでした。また、自然のこころを伝えることも、鹿追の歴史、最新の設備、鹿追の問題など幅広い記事を書き上げました。製作者の皆も、意欲的に来あがったと思います。そして、取材をさせて下さった方々のたくさんの協力のおかげで、この壁新聞が出来ました。僕達も、一致団結し、作り上げた『花鳥風月』をぜひご覧ください。

《制作者》
編集長 武藤 昌也
副編集長 井原 瑞樹
編集委員 井原 瑞樹
井原 瑞樹
井原 瑞樹